

2019 年度前期 授業改善アンケート結果に対する意見

—社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 内田 真人

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目¹について、2019 年度前期に実施された²授業改善アンケートの結果全体に対してコメントを述べる。

まず、2019 年度前期授業改善アンケートの集計結果に対する所見は、12 の項目（これらの中には履修者の授業への参画や事前・事後学習の状況に関するものも含まれる）のうち 8 項目について、5 点尺度において全体の平均値が 4 点以上となっている。また、授業全体に対する評価である項目 10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は 4.11 点（昨年度 4.08）であった。さらに、昨年度と比べると数値が全体的にやや上回っている。以上のことから判断して、今年度前期も概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたことが窺える。

項目別にやや詳しく見ると、4 点以上となった項目の内容は昨年度前期とほぼ同じである。具体的には、項目 8「シラバスと授業の内容が一致していた」（4.27 点＜昨年度 4.23 点＞）、項目 3「教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた」（4.25 点＜同 4.22 点＞）、項目 6「教員は教室が学習にふさわしい状態（私語等対応）に保たれるよう心掛けた」（4.17 点＜同 4.19＞）、項目 4「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」（4.14 点＜同 4.11＞）となっている。他方、授業科目の授業形態については、講義、演習及び（外国語科目のような）実技とあり、また、授業科目ごとの履修者数及び出席者数は異なることから、項目 7「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」（3.99 点＜同 3.96 点＞）について全体として判断することは難しいが、項目 12「1 回分の授業にあたり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均の時間」の平均値は「0.5 時間以上 1 時間未満」と「0.5 時間未満」との間にある（2.44 点＜同 2.46＞）ことから、引き続き授業時間外の学習をさらに促していくことも必要であろう。

また、本アンケートでは履修者各人の観点からの授業全体に対する総合的評価であるともみなすことができる項目 10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」について、他の科目との相関係数(r)も示されている。その内容を見ると、この授業全体に対する総合的評価は、授業科目により学生自身にとって興味や関心が得られたことと強く相関していることはもとより、

¹社会イノベーション学部の政策イノベーション学科及び心理社会学科の学生が履修する両学科の教育課程は、社会イノベーション学部が《科目開設部門》となっている授業科目のほか、両学科の教育課程における科目区分別で、「総合教養科目」に配置される授業科目のほとんど、「学部共通科目」に配置される授業科目のほとんど、及び「一般共通科目」に配置される授業科目のすべては、《科目開設部門》が共通教育研究センター、国際センター、及びキャリアセンターのいずれかとなる授業科目で構成されている。

²授業改善アンケートは、前期には、前期の半期の授業科目について、後期には、通年及び後期の半期の授業科目について実施された。

学生がより良く受容できるように授業を適切に実施することとも比較的強く相関していることが示されている。引き続き、授業の適切な実施に向けて努力を維持していくことが望まれる。

「授業で用いられた授業手法」については、授業科目の授業形態の相違もさることながら、授業科目においてそれぞれ用いられる授業手法は異なることから、授業科目ごとの履修者数等を考慮しないままで、《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目に係る単純な合計から示唆を得ることは困難である。それでも、課題、学生によるコメントペーパーなど多様な授業手法が取られていることが窺われる。また、授業を通じて身についた資質についても、その分野の知識・学力のみならず、言語運用能力（主に英語）、論理的思考力、プレゼンテーション能力など多様な資質・能力の涵養につながっていることが窺われる。

また、《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目を大学全体の授業科目と比較した場合、「授業で用いられた授業手法」や「授業を通じて...身についた資質・能力」として回答された項目の全体的傾向は類似しているが、課題、グループワーク、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などで大学全体よりは若干回答割合が高い。

さらに、授業改善アンケートの回答用紙の裏面には、3つの質問からなる自由回答記述欄が含まれており、評点法だけではわからない個々の授業科目に対する履修者からのさまざまな評価や意見等のコメントが示されている。限られた時間内において、回答用紙表面の評点法部分への回答に加え、記述を行ってくれている学生諸君には感謝したい。これらのコメントは、まず基本的には授業科目担当者本人において活用されることが期待されている。現状において、この欄に記述を行った学生は相対的に少数であることから、必ずしも回答者全体の評価を反映しているとはいえないかもしれない。しかし全般として、翌年度に向けて、好ましい点をさらに伸長させ、また好ましくない点について改善を図る上でたいへん参考となるものである。さて、これらの自由記述について、同一の授業科目に対して、履修者が異なる多くの年度にわたって継続的に、学生から同様の趣旨の改善を求めるコメントが寄せられているものもある。合理的な理由が見いだせない場合には、授業改善が十分には図られていない状況も推定される。このような授業科目については、授業担当者にとどまらず学部として組織的に、授業改善を図るべく取り組んでいきたい。

最後に、本授業改善アンケートは、実施必須科目のほぼすべて及び実施任意科目の約78%（昨年度65%）で実施された。また、延履修者数に対する延回答者数は79%であり、授業に参加していた学生全体の評価を十分に反映した結果であるものと判断できる。ただし、回答学生自身の授業出席率に関する項目1及び授業時間外の事前・事後学習に費やした時間に関する項目12については無回答・無効数の割合がわずかに高くなっており、学生諸君による注意をより払った回答が期待される。